

日本台湾学会 ニュースレター

第12号 2007年3月

特集 第8回学術大会を振り返って

日本台湾学会では、2006年6月3日に第8回学術大会を一橋大学で開催した。例年通り各セッションの企画責任者や座長等に内容や討論についての要旨をお願いしたので、今号の特集としてまとめて掲載する。(編集部)

第8回学術大会を振り返って 実行委員長 松永正義 (一橋大学)

昨年行われた第8回学術大会について報告するよいうということなので、簡単に概要の報告をしたい。大会は昨年6月3日、一橋大学国立東キャンパスで行われた。この時期は日柄が良いせいか、前期の学園祭の希望をこちらが先に申し込んだということで排除し、また大学のホームカミングデーと棲み分けるなど、小さな大学なので場所の確保が大変だった。棲み分けがうまくいったのか、ホームカミングデーに人が集まらなかったのか、混雑もなく終わったのは幸いだった。また天理大会のように新聞に取り上げられるといったこともなく、どのくらい人が集まるか心配だったが、大会参加者は188人、懇親会参加者はアルバイトの学生をふくめて122人ということで、予想の人数を上まわる盛会だった。懇親会の料理は80人分注文して、アルバイト学生等をふくむ90人強をまかなう予定だったのが、参加者が大幅に超過したため、瞬時でなくなってしまった。会費を払ってくださったかたは、はじめからその3分の2しか料理が用意されていなかったのだから、詐欺みたいのもので、大変申し訳なかったと思う。もっともそこで生じた赤字で運営費の一部を補填できたので、良心的な詐欺ということでお許しいただければと思う。分科会は4つの企画分科会と6つの自由論題で、計7つの分科会だった。今回は実行委員会企画を出さなかったのだが、以前から企画が多くてあちこちの報告をつまみ食いすることになり、全体で考えることが少ないように思っていたので、あえて分科会を増やすことがためられ、結局企画を出さないことにしていただいた。台湾研究は必然的に学際的研究にならざるをえないものだと思うので、自分の専門以外の報告を聞くことはとても重要だと思う。だが自分の専門の報告も聞かないわけにはいかないから、そこにジレンマがあって、その意味でも報告は精選された少数であることが望ましいと思う。もっともこうした考え方は、わたし自身が研究を始めたとき、春山、若林、河原、金子、森といった全く専門の違う仲間と討論できたことが、大きな財産になっているように思う、そのことへのノスタルジーであって、台湾の研究状況を見ても、そんな牧歌的な時代ではなくなっているのかもしれない。

実行委員のなかで一橋の教員が私ひとりであったことは、やはり問題だった。一方で鍵の管理をするということは、常に現場にいななければならないということで、しかし他方理事会、総会など立場上いなければいけないところもあり、単位に最低二人の教員は必要だと思った。それでも大過なく終わることができたのは、名前を挙げることはしないが、手伝いの学生のみなさんが自主的に動いてくれたおかげだと思う。また準備段階をふくめて実行委員の皆さんにも助けられた。こちらはお名前を挙げておく。春山明哲、河原功(書店)、張士陽(会計)、川上桃子(会計)、垂水千恵(プログラム)、松金公正(報告集)、丸川哲史(事務統括)、橋本恭子(会計)のみなさんである。春山さんに任務分担がないのは、ご意見番だからである。

前回の天理大会では委員長の下村さんは、跳び回りながら、かつ報告もしっかり聞いておられたようだが、わたしは慣れないことなので気力がなく、といてやることもないので、ひがな本部でタバコを吸っていた塩梅だった。ずっとだったから本部はだいぶ煙かったのではないかと思う。でも見かけと裏腹に緊張はしていたらしく、朝は怖い顔だったが、夜にはうってかわって穏やかな顔になっていたと、学生に言われてしまった。不覚の至りである。

性格として事前に考えを詰めることができず、誰から参加費を取るか、欠席者の参加費の返却要求をどうするか、といったことについて、その場その場で決定してしまったため、全体として整合性を欠く結果となった点がある。心当たりの方にはお詫び申し上げたい。もっともこうした行事は生き物だから、遺漏なく考えたつもりでも問題は出てくるだろう。問題を申し送り、蓄積していくことは必要だと感じた。とはいうもののマニュアルが肥大化して、その勉強に追われるようでは、今の大学みたくで味気ない気もする。この学会は発展途上だから、そうなるまでにはだいぶ余裕があるだろうが、小さな学会のアバウトな良さと、大きな学会の盛んな様とは、なかなか両立しがたいのだろう。斯学のためには後者が望ましいが、前者の良さも捨てがたい。両者を調和するのは幹事役の個性ということになるのだろうが、その点ではこの学会は悪くないと思う。

報告のつもりがモノローグじみてきたので、もうおしまいにしたいが、最後に記録しておかなければならないのは、総会の前に故石田浩理事長を偲ぶ集いを行わなければならなかったことだ。わたしは石田さんとは何かのおりにご挨拶した程度の面識しかないが、御著書を通じての勉強はさせていただいた。残念なことだ。改めて石田さんのご冥福をお祈りして、稿を閉じたい。

エスニック・マイノリティからみる
台湾の多文化主義
—人類学的考察—
報告者 横田祥子

(東京都立大学大学院博士課程)

従来から台湾はマルチ・エスニックな様相を呈してきた。台湾のローカルな「多文化主義」は、オーストラリアやカナダにおける多文化主義政策を参考にして導入されたというよりは、台湾独自の政治的、歴史的変遷の中で醸成されてきたものである。本分科会は、宮岡真央子(福岡大学)が企画し、台湾のエスニック・マイノリティを研究している4名が、現地調査で得た資料に基づき、台湾の「多文化主義」政策がいかに人びとの政治活動や生活を規定し、また人びとはいかに対応しているかについて報告を行なった。

石垣直(東京都立大学大学院博士課程)は、「現代台湾の多文化主義と『先住権』の行方—土地をめぐる権利回復運動の事例から—」と題し、先住民居住地域に対する土地政策史、1980年代半ば以降の先住民による権利回復運動の歴史を整理した上で、1947年に公布・施行された「中華民国憲法」ならびに近年の台湾の多文化主義政策下で先住民による「先住権」の主張が直面する問題点を指摘した。その上で石垣は、台湾先住民による権利回復運動の未来に光を見出そうとしている。

木村自(国立民族学博物館)は、「躊躇するアイデンティティ—台湾の多文化主義と回民(中国ムスリム)の生存戦略—」と題し、イスラム教を信仰する「回民」の過去の文化多元主義政策から現在の多文化主義政策における政治的地位の変遷を回顧した。同時に「回民」が自らをエスニック・マイノリティとして位置づけ、権益の回復を図ろうとするエリート層の動きを報告した。木村はエリート層の戦略から、台湾の多文化主義が想定するエスニック・グループ像を浮き彫りにした。

宮岡真央子(福岡大学)は、「台湾における〈多元文化〉の語られ方—台湾原住民族村落におけるコミュニティ開発を事例として—」にて、ツォウの村落観光化を取り上げた。宮岡は、現行のコミュニティ開発の枠組みがツォウの共同体の単位と一致せず、コミュニティの担い手にコミュニティの在り方を選択・決定させないものである点、固有文化が、文化産業の資源へと淘汰されている点を挙げ、〈多元文化〉という語が文化の産業化を促進させるものとして用いられていると指摘した。

横田祥子(東京都立大学大学院博士課程)は、「〈文化中国〉意識と多文化主義のせめぎあい—台湾・東南アジア系移民受容の対応から—」で、近年社会問題視される婚姻移民に対し、コスモポリタニズム精神に基づく多文化主義的対応と、漢族ショービニズムに基づく二つの対応があることを指摘した。具体的には、対移民政策、婚姻移民NPOの活動を紹介し、日常世界で観察された婚姻移民像を取り上げた。また、婚姻移民の増加が「中国人性」の継承を喚起している可能性を指摘した。

本分科会の座長は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の三尾裕子氏が務めた。また、石垣・木村の発表に対しては関西学院大学の山路勝彦氏が、宮岡・横田の発表に対しては台湾・東華大学の呉天泰氏がそれぞれコメンテーターを務めた。

会場からは以下のような意見が寄せられた。1. 先住民の土地返還問題を検討するに当たっては戦前の文献資料の詳細な検討が必須ではないか。2. 外省人は従来、エスニック・マイノリティとしての言説を用いてこなかったが、本発表から外省人の新たな戦略が読み取れるのではないか。3. 教育問題の根幹にある意識は、「中国人性」の伝達、あるいは「客家人性」「台湾人性」の伝達なのか、再検討すべきである。4. 分科会で論じられた「多文化主義」は多側面に渡っており、その内容を定義し限定したうえで議論を展開すべきではなかったか、などである。

本分科会では議論が多岐に渡ってしまったが、「四大族群」の次に到来した多文化主義時代を検討するための第一歩を踏み出したのではなかろうか。

越境するモダニズム

—台湾現代詩の展望—

企画責任者 三木直大(広島大学)

台湾文学研究において取り上げられることの少ない台湾現代詩を扱うセッションを企画した。日本植民地期日本語詩・日本昭和詩・大陸現代詩・日本戦後詩を相互に視野に入れながら、台湾現代詩における「モダニズム」とは何かを検討することがならいであった。モダニズムを、現代文学を考えるために必須の多義性をはらんだ広義の概念にとらえ、台湾現代詩研究の新しい展望を開きたいと考えたためである。コメンテーターも報告者の一人と位置づけ、報告者とコメンテーターが相互に補い合い議論を深められればと考えた。

三木直大(広島大学)は、日本植民地期の楊熾昌の風車詩社、1950年代の紀弦・林亨泰らによる台湾現代詩の再創出運動である「現代派運動」、1960年代の『笠』詩社の成立を中心に、台湾現代詩における現代主義を考えるうえでの問題点を整理した。白先勇らの『現代文学』の成員であり『笠』詩社設立の発起人でもあった杜國清(カルフォルニア大)は、文学史の現場に関わった詩人として、三木の整理する台湾現代主義の論点を補足修正するとともに、初期『笠』詩社の文学的本質が本省人詩人による中国語現代主義詩の確立であったことを論じた。

上田哲二(日本台湾学会会員)は、外省人詩人余光中を取り上げ、彼の作品に表象される「家郷」が実態としての大陸を指すのではなく、そこに現前するのは虚構としての「家郷」であるとして、余光中における「失われた家郷」と想像の「中国」とは何かを論じた。山口守(日本大学)はそれに対し、余光中作品における「ナショナリズム」の問題をとりあげ、白先勇の「台北人シリーズ」等と比較検討するなど台湾文学における「ノスタルジア」の様々な表象の本質にあるものを論じることを通して、「中華文明ナショナリスト」としての余光中像を浮かびあがらせた。

阮美慧(東海大学)は、『笠』の台湾現代詩が、日本戦後詩とリわけ鮎川信夫や田村隆一ら「荒地派」の影響下に書かれていることを実証的に明らかにしつつ、台湾現代詩がそれをどのように受容し変容したか、「荒地派」の詩論がどのように『笠』の詩人たちの詩論展開に影響を与えたかを論じた。陳明台(中正大学)はそれに対し『笠』の詩人たちの世代間の相違という問題を指摘し、第一世代の詩人たちの日本現代詩の受容の問題を日本昭和詩の『詩と詩論』グループの前衛詩にまで遡りつつ、台湾現代詩史の画期を「風車詩社」「現代派運動」「笠詩社成立」として、その展開に現代主義の果たした役割を論じた。

松浦恆雄(大阪市立大学)は、台湾現代詩における詩の言語の冒険を、痲(※ア)弦など外省人詩人たちの作品を中心に、「軍中詩人」でもあった彼らの50年代60年代の台湾社会における位置を考察しながら、その「超現実主義」の持つ意味を論じた。池上貞子(跡見女子大)はそれに対し、焦桐の詩集『完全強食レンビ』を中心に、台湾のより若い世代の詩人たちの言語の冒険が現在の台湾現代詩にさらにどう展開されていったかを、具体的な作品分析を通して論じた。

問題点が多岐に渡ったため、提出された論点のひとつひとつを議論する時間的余裕がなく、また台湾現代詩についてはこれまでほとんど紹介がないことから、分科会聴講者と問題意識を共有することが難しく、その点では消化不良になったことは否めない。そうした反省はあるが、初めての台湾現代詩の分科会としては意味があったのではと考える。今後、この分科会を契機になって台湾現代詩の研究が増えることを期待したい。

日本統治下
台湾に向けられた個人の語りの探求
企画責任者 富田哲(淡江大学)

本分科会は、大会直前に急遽報告者が入れ替わり、大会実行委員会および参加された方々に多大なご迷惑をおかけしてしまつた。心よりおわび申しあげたい。

当日は、まず病気で参加できなくなったアン・ヘレン氏(ルール大学ポーフム校)の報告趣旨を富田が紹介した後、ポール・バークレー氏(ラファエットカレッジ)が“Abstract Thought as the Lowest Common Denominator: What Early Japanese Travel Narratives to Taiwan’s Interior Can Teach Us”と題して報告をおこなった。バークレー氏は、総督府官僚・官吏を、中央志向の「求心的(centripetally) 官僚」(後藤新平、持地六三郎など)と土着志向の「遠心的(centrifugally) 官吏」(伊能嘉矩や森丑之助など)に分類する。そして、両者の原住民に対する語りには根本的な知的断絶が存在したという。後者は現場の知を重視するが、前者は「生」の情報ではなく、より抽象化・カテゴリー化された形での知を要求する。フィールドの知が政策立案の場へ上がっていく過程には、「生」の情報をろ過する政治的スクリーンが存在しており、合理性を重んじる求心的官僚のもとに「蕃地」の実情は届きにくくなっていた。とくに原住民の武力抵抗が沈静化した1910年代以降、かれらの「蕃地」に対する関心は薄れたが、それが後年、霧社事件の遠因にもなつたと指摘する。

これに対して富田はコメントで、求心的・遠心的という概念は興味深い、もしこのように活躍の場や思考体系を異にする集団が描出できるとすれば、そこにはどのような「巡礼圏」が存在していたのか(たとえば遠心的官吏の上昇コースはいかなるものだったのか)、また政治的スクリーンの具体的形態や機能について質問した。

続いて、武久康高氏(淡江大学)が「台湾の内地人」が語る植民地台湾 - 『台湾実業界』における宮川次郎の語りを軸として」を報告した。『台湾実業界』は、台湾在住の宮川次郎によって1929年に創刊された月刊誌である。ここで宮川は、「我々」在内地人を、経済的・民族的に本島人に飲みこまれてしまいかねない、さらに台湾の事情など知らない内地からの内地人にも権益を侵害される「犠牲者」としてえがく。ただ「我々」は、「功名手柄ばかり急いであと野となれ山となれで、赤い舌を出して、サッサと帰る御連中」(宮川の1936年の文章)、すなわち役人や資本家を批判する立場にも立つ。

また、この雑誌は、当初は台湾での頒布が大多数であったが、1933年からは内地での頒布数が急増しているという。これによって、語りかけの対象に「内地」の人々も含まれるようになったのではないかと武久氏は推測している。

武久氏の報告に対しては、磯田一雄氏(大阪経済法科大学)が「在満日本人」を対照させながらコメントした。在満日本人と在内地人をめぐり議論には類似性もあるが相違点も見いだせるという。相違点に関連して磯田氏があげた「郷土意識」という観点は非常に興味深かった。在満日本人は、「外地」に住む日本人のなかでは居住地に対する郷土意識がいちばん強かったのではないかとこのことだが、台湾ではそれほどでもなかったようである。たしかに宮川の議論も、「土着性」を言う文言は見られるものの、台湾を郷土として強く意識するような論調にはなっていない。

参加者からは、バークレー報告に対して、伊能の未公開資料の内容についての質問、伊能嘉矩が執筆をおこなう際、助手が筆記や資料の収集にかかわつたろうし、総督府のすべての公文にアクセスできたわけでもないだろうから、すでに遠心的官吏の段階でかなりの情報が落ちてしまっている可能性はないのか、という意見、また武久報告には、宮川の小作慣行改善事業への関与や台湾人の民族運動への批判を、在内地人論との関連でどのようにとらえるか、内地人が「犠牲者」と一部の富裕層に二極分化していたように見える状況で、宮川の語りはどこに向けられていたのか、宮川のその後は、といった質問があつた。

なお、多少の出入りはあつたが、フロアの参加者は20名前後だった。

日本・台湾・中国関係史の新展開

企画責任者 松田康博(防衛庁防衛研究所)

清水麗(国士舘大学)「蔣経国時代日台関係の実質と位置づけ」の概要は、以下の通りである。蔣経国時代の対日関係は、台湾の孤立化戦略を展開する中国の外交活動への対処の一環と位置づけられる。したがって、「日中関係のなかの台湾」という枠組みを拒否する論理上矛盾のない範囲内で対日外交が展開されるが、航空路問題のように外交原則に関わる政治問題化した場合には、保守勢力との関係から台湾の選択肢の柔軟性は失われる。また、「日本とのパイプの一元化」(馬樹禮)には、交流協会が台湾との交渉チャンネルとして認知され、蒋介石時代の特殊なチャンネルから「正常化」されたという側面と、蔣経国政権下での対日政策の一元化が進み、亜東関係協会東京弁事処が経済コミュニケーションの確保などで重要な役割を果たしたという側面がある。蔣経国時代は、日本における台湾の活動空間確保のために、沖縄・台湾間の海底ケーブル敷設交渉などにみられるように政治問題化させず処理されたケースもあり、政治問題化されなかった係争点の処理過程を十分に検討していくことは重要な課題である。

井上正也氏(神戸大学大学院・非会員)から出された両報告へのコメントと質問の概要は以下の通りである。二元外交は多くの国で見られるが、日台間の外交間チャンネルは蔣経国時期に一元化された。これは佐藤と張群・蒋介石間のトップレベル・チャンネルが外交部・外務省に下りたのか、佐藤が首相を辞任したことでチャンネルが変わつたのか、それともそれまでの 이슈が消滅したことが原因なのか、厳密な検討が必要である。また、連続性という観点からは、陳建中のような特務人員のラインの存在や、台湾に対日グランドストラテジーの有無も検討すべきであろう。

第2報告、松田康博「中台関係における日本-日本の対台湾関与の変化とアクター間の認識ギャップ」の概要は、以下の通りである。中台関係において日本が果たしている役割の実態はどのようなものであるのかを1990年代以降を中心に明らかにした。日本の対台湾政策の調整には一定の傾向が見て取れる。日本は、中台の利害関係がゼロサム関係にある領域でも、いくつか中国の意図に反して台湾寄りの政策決定をしてきた。それは、日本の安全保障・日米同盟に関わる領域、日本の主権に関わる領域、経済・社会に関わる非政治的領域、人道問題に関わる領域である。こうした領域に関しては、「日本の譲れない国益」や「日本の主体的な判断」を重視するために「結果として台湾寄り」の判断がなされる。ただし、これは、必ずしも周到な準備を基にした主導的戦略転換ではない。中台関係における日本の役割とは、「受動的なバランス」とでもいうべきものである。

岡田充会員(共同通信社)およびフロアの会員から出された両報告へのコメントと質問の概要は以下の通りである。松田報告は、(1)「72年体制」は大枠で変化がない、(2)日本では世論の動向が重要になっている、(3)日本が「受動的なバランス」である

とのことである。いずれ、日本には台湾海峡問題に関して、主体的な選択は可能ではないのだろうか、「1つの中国」が動揺することはないのであろうか、という疑問に答える必要がでてくるであろう。また、中台関係の「ノンゼロサム」問題はどれほどあるのか、重要な問題はほとんど「ゼロサム」ではないのか、という疑問も提起された。

参加者は50名近くに上り、活発な議論が展開された。

自由論題報告I (歴史分野) 座長 松田吉郎 (兵庫教育大学)

本分科会では自由論題報告Iとして歴史分野に関する2つの報告が行われた。

まず、金戸幸子 (東京大学大学院博士課程) が「1930年前後の沖縄県八重山地方から植民地台湾への〈周縁〉に生きる人々の自発的な移動—女性の移動を中心として—」という報告を行った。

本報告は、植民地下の台湾が、八重山の人々にとってあこがれの地であったこと、台湾体験が引揚者にとって、その後の人生を生きる上での文化資本となったことを、台湾での就労構造などのマクロデータと、インタビュー調査や手記により得られたミクロデータを組み合わせて実証しようとするものであった。

とくに八重山から植民地台湾へ渡った女性たちの多くは、「女中」奉公のかたわら、夜間学校や職業学校で専門的な技術を習得した上で、帰郷後に助産婦となって地域医療の第一線を担ったり、与那国で最初的美容院を開業するなどしており、台湾引揚者のなかから数多くの専門的技術を有する女性が輩出されていることが示された。

会場からは、分析にあたって重要な概念として提起されていた台湾の「モダニティ」が当事者たちにとってどのように内面化されていたのかについて問う質問や、「境界」概念の確認や妥当性を問う質問などが寄せられた。

次に、陳虹彬 (※フン) (東北大学大学院博士課程) が「台湾省行政長官公署時期(1945~1947)台湾における教科書編修に関する一考察—国民学校・中等学校暫用国語課本を中心に—」という報告を行った。

本報告は、終戦後中国政府によって最初に編纂された台湾の国民学校と中等学校暫用「国語」教科書について初めて本格的にメスを入れるものであった。

暫用国語教科書の使用期間は1946年2月から8月までとわずか半年間であったが、統治者の政治的意図や目的が教材を通してストレートに表現されている。そのため、暫用教科書の編纂事情の解明を通して、終戦直後の台湾の国語教育の実施、教科書の編纂をより詳しく追究することが可能となった。

さらに、中国政府がこの半年間に見せた国語教育方針の変更や、方法上の変化などには、台湾における台湾語・中国語・日本語などの複雑な言語使用の実際状況が反映されていることもあきらかとなった。

今後の課題としては、暫用国語教科書の詳細な出版状況や、同時期の中国の教科書との比較、そして、教材内容に対する調査と分析が必要ということがあげられよう。

自由論題報告II (文学分野) 座長 澤井律之 (京都光華女子大学)

朱恵足「皇民化時期において植民地台湾の葬儀をフィクションにする」

本報告は、民俗学と文学と2つの領域を横断しながら、台湾人における葬儀の文学的表象を、戦時下の皇民化政策という歴史的な文脈において検証するものである。日本語によって書かれたテキストにおいて、日本人植民者と台湾人エリートはそれぞれ、いかに台湾の葬儀実践の形式性を理解していたか。皇民化の要請に意識しながら他者を表象するプロセスのなかで、異なる観察の位置はそれぞれいかに機能していたか。日本語小説『陳夫人』、「鄭一家」、「財子寿」、中国語小説「安息之日」などを取り上げ、植民地台湾で生産された一連の「民族誌小説」を異文化接触、帝国のイデオロギー、そして植民地的な主体位置が交錯する場として取り扱い、土着の悲しむ行為をテキスト化する際に、どのような言語的、文化的、そして帝國的な翻訳の政治学が稼働しているのかを考察した。

コメンテーターの星名宏修氏からは、朱氏のいう「透明でオリジナルな表現」(=「帝國的な翻訳の政治学」に左右されない表現?)について疑問が提示された。フロアーからは「帝國的」という用語の使い方がわかりにくいとの意見があった。

沈美雪「漢字文化圏における俳句受容の現状と問題点—台湾俳壇を中心に—」

日本植民地統治下において、日本文化は植民地支配の形で台湾に入り込んだ。日本の伝統文芸である「俳句」も、日本と風土・気候の異なる台湾において独自の展開を遂げ、近代俳句史上、異色の輝きを放っている。

戦後、日本人が引き揚げ、更に日本語使用の禁止により、俳句を含む日本語文芸は急速に影を潜めた。しかし厳しい環境の中でも俳句活動は「台北俳句会」の有志者たちによって続けられてきた。

本報告は、こうした日本植民地統治以来の台湾俳壇を概観し、台湾俳句の特殊性や台湾俳壇が樹立するまでの道程と問題点を明らかにしようとするものである。特に日本統治期の台湾俳壇を代表する「ゆうかり」社の歩みと功績を中心に、台湾という限定された地域における俳句のあり方を探り、季節詩である俳句の本質の問題を俳句の持つ普遍性と地域性による特殊性の両方から考察を加えた。

コメンテーターの岡崎郁子氏からは、「台湾俳壇」とは台湾在住の俳人によるものか台湾人俳人によるものか位置づけが不明確であること、引用の誤りが多いこと等が指摘された。

自由論題報告III (政治分野) 座長 浅野豊美(中京大学)

本自由論題報告は、奇しくも、中華民国が大陸の領土を喪失して、実効支配地域を台湾と周辺諸島嶼に縮小させていった際に展開された外交(対イギリス)と内政(その後の大陸反抗作戦時代を含む)を扱うものとなった。

林報告は、日本留学経験がないとは信じられないほどの巧みな日本語を使って、「戦争遺産」という大胆な概念を呈示して、

戦後台湾における国民党統治下の政治体制を、比較政治学的見地から生み出された権威主義体制や党国家体制、及びそのバリエーションとしての通説的概念とは異なる見地から分析した。

その分析視点は、実際に戦われた抗日戦争、国共内戦、台湾亡命後に想像された戦争として計画された大陸反攻作戦という、3つの戦争と其中で重層的に形成された「戦時及び準戦時の総動員体制」を中心に各期の連続性を重視して設定するものであった。林報告がユニークであった点は、その戦時体制論を支えた骨格となる幾つかの重要法令に着目し、その相互の役割分担、社会的機能を論じることで、比較政治学の理論的見地から一旦離れて、戦後台湾における社会と国家の関係を個別実証的な個々の法令分析を通じて実証的に把握するための方法論的可能性を呈示したことにあった。具体的に、林報告が着目したのは、総動員法、戒厳法、動員戡乱時期臨時條款の3つの重要法令で、その3つをそれぞれ根拠として数々の行政命令の体系が生まれる一方、各々は経済的社会的統制（総動員法）、人権と自由の抑圧（戒厳令）、統治体制の変更（動員戡乱時期臨時條款）というように役割分担をしていたが指摘された。蔣経国の戒厳令解除は部分的なものに過ぎないと指摘も新鮮であった。

若畑コメンテーターからは、植民地時代に形成された戦時動員体制を分析に含める必要性、戦争遺産概念を台湾人意識の説明にまで用いることの問題点、個々の組織や制度にも注目することの重要性などが指摘され、フロアの松田康博会員からは、日本の旧軍人顧問団である白団が総動員体制構築に果たした役割について、楊会員からは戦争遺産という概念の不透明さについて質問があった。司会者としては、違憲立法審査制度の機能不全の理由、憲法外的機関としての国家安全会議の構成と選出方法、「動員戡乱時期」を認定する主体と方法について考察することが、質問を踏まえた更なる実証分析の向上に資するように感じられた。

竹茂報告は、1972年以後、台湾の中華民国政府と断交した日本やアメリカ等の諸国との間で形成されていった社会経済的実務関係の起源を、1950年、主要国の中で最初に中華民国と断交したイギリスとのその後の社会経済面での非公式な関係のあり方に求めたものであった。報告者が個別具体的に指摘したのは、無条約国との間での、航空機、出入境、通商に関する中華民国の国内法が1950年の対英断交後に既に形成されていたという事実である。「外交部档案」、「蒋介石档案（大溪档案）」や当時の法令を丹念に読み解きながらの分析を通じて、対英断交後の無条約国民の待遇に関する国内関連法令の形成が解き明かされた。その地道な努力は高く評価されるべきである。

前田コメンテーターからは、対英関係維持と英国への期待の理由、台湾大の政権として事実上承認されてしまいかねないことへの危惧の有無、朝鮮戦争前後での対英認識変化について質問が寄せられ、領事関係の詳細についての質問が寄せられた。フロアの石川会員からは大陸反攻作戦を成功させる上で対英領事関係維持にはどのような期待が込められていたのか、佐橋会員からは消極的な対応ではなく中華民国からの積極的な外交巻き返しの意味はなかったかとの質問が寄せられた。司会者には、英帝国の中でもビルマとインドが真っ先に大陸を承認したことの意味は、日中戦争におけるが如き重慶や成都を拠点とする抵抗は支持できないことにあったこと、その一方で、南アフリカやオーストラリア等が台湾と長く友好関係を保持したことを考える必要があると思われた。

総じて、両報告は、「中華民国」が大陸の政権から台湾大の政権へと性格を大きく変じる過程を対象としながら、現代の冷戦後の台湾を取り巻く国際秩序と台湾の内政上の経済成長と民主化インパクトの意味を、その時代に遡って考察せんとする大胆な問題意識を共有していた。その点で遷移後の国家の構造的変容と社会的定着を、貿易や安保を通じた国際関係と兼ね合わせて論じていく視点を切り開くもので、相互に対話し得る点で意義深いものであった。司会者の力量不足で内政と外交のリンケージにまつわる相互の建設的対話に十分進めなかったことが悔やまれる。

<記念講演>

戦後台湾における台湾研究について —台湾史研究を中心として— 張勝彦（国立台北大学）

第8回学術大会の記念講演は、国立台北大学教授の張勝彦氏が「戦後台湾における台湾研究について—台湾史研究を中心として—」とのテーマで、各大学の台湾史研究課程設置状況の変遷や各時期における修・博士論文テーマのトレンドなどについて、豊富なデータに基づいた詳細な報告を行った。

図表を多用した丁寧な説明に加えて、しゃれっ気十分のジョークあり、皮肉たっぷりの“冷笑話”ありの、ユーモアあふれる口調が会場を魅了した。しかし、圧巻はやはり体験に裏打ちされた言葉の数々であろう。「我々〔の世代〕は勇気があった」「刑法第100条は戒厳令よりも強力だった」といった言葉には、戦後台湾の“歴史”とともに歩んで来られた方ならではの重みがあった。

（竹茂敦・法政大学大学院）

台湾研究関連情報

台湾歴史文学研究会のあゆみ 橋本恭子（一橋大学大学院博士課程）

近年、台湾では全国各地の大学に台湾関係の学科や研究所が設立され、研究者も大幅に増え、台湾文学・歴史の研究は質量ともに著しい進歩を見せている。一方、日本では、台湾文学や台湾史を扱う機関が少なく、研究者同士が集まる機会も非常に限られている。そのため、研究者が交流し、切磋琢磨できる場が必要ではないかとの思いから、2004年5月、一橋大学松永ゼミの卒業生丸川哲史および博士課程の橋本を呼びかけ人とし、他数人のゼミ生を運営メンバーに加え、松永正義先生のサポートの下に、「台湾歴史文学研究会」が発足した。出発にあたり私たちが議論したのは、台湾研究においては文学と歴史は切り離して論じられないということ、また、隣接する領域にも注意を向けなければならないということであった。さらに、特定の政治的立場にこだわらず、戦前・戦後を通した幅広い視野を養える場にしたいと考えた。

報告者の選択については、まず、博士論文執筆中の院生に時間をかけて発表できる場を提供すること、すでに第一線で活躍されている研究者の最新の研究成果をご披露いただくこと、さらに台湾をはじめとする海外の研究者との交流を積極的に進めるこ

と、また、在野の台湾関係者をお招きし、アカデミズムに限定されがちな研究に揺さぶりをかけること、の4点に留意した。こうして、2004年4月15日に第1回研究会が開催され、以来、一橋大学西キャンパスの職員集会所を会場に、夏冬の長期休暇を除き、ほぼ毎月一度のペースで行われている。この7月で第19回、まもなく20回に達しようというこの機会にこれまでの歩みを振り返ってみたい。

まずこの間、植民地期の台湾話文運動について二度発表した（第4回、2004.9；第18回、2006.6）李尚霖会員（一橋大学院卒、）が博士論文を提出、先日、無事帰国したことを特記したい。言語に関しては、他にも林初梅会員（一橋大学院生）が現代の台湾における「郷土言語」教育について（第7回、2005.1）、菅野敦志さん（早稲田大学院生）が戦後直後の台湾語を媒介とした国語教育について発表され（第5回、2004.10）、連続した問題意識が形成されつつある。

また、1970年代から日本における台湾研究をリードされてきた春山明哲先生（国会図書館）、若林正文先生（東京大学）、松永正義先生にもご報告いただいた。まず、春山先生からは、近代台湾に係わったキリスト者井上伊之助について新たな研究成果をご発表いただき（第3回、2004.7）、若林先生からは民主体制の不安定要素としてのエスニック・ナショナルな文脈と政治構造変動という、非常にアクチュアルなテーマを（第10回、2005.5）、松永先生からはこれまでの研究成果の総括のような形で、台湾を語る難しさについてお話いただいた（第17回、2006.4）。さらに丸川哲史運営委員（明治大学）は二二八事件以後の文化空間を問い直しつつ、戦後台湾の文化状況について報告した（第1回、2004.5）。

海外からの研究者では、静宜大学の蘇瑤崇先生が新たな資料を基に、戦後台湾の政権交代と台湾主体意識の発展についてお話しくださり（第2回、2004.6）、清華大学の柳書琴先生は日本ではほとんど研究されていない日本統治期の漢文通俗小説の意義を報告された（第12回、2005.7）。天津から来日された郭承敏先生（天津社会科学院）は、台南で成長し、終戦直前の一高に学び、その後、中国に渡られた数奇な生き方を語られた（第13回、2005.9）。

留学生の報告では、楊智景さん（お茶の水女子大学院生）が植民地時代の日本人旅行記に見られる台湾原住民表象について（第6回、2004.11）、紀旭峰会員（早稲田大学院生）が台湾人内地留學生が下宿した高砂寮の位置づけを（第11回、2005.6）、黄毓婷さん（東京大学院生）が同じく内地にやってきた台湾人作家翁鬧を高円寺という地理的な視点から論じた（第16回、2006.3）。いずれも日本留学の成果をフルに生かした報告であった。

反対に一年間、台湾に留学された赤松美和子さん（お茶の水女子大学院生）には、台湾で文芸キャンプに参加された貴重な経験をお話いただいた（第14回、2005.10）。

台湾の文学や歴史を隣接分野からも考察したいという点では、鈴木将久先生（明治大学）が日中戦争下の上海の文化構造と台湾とを関連付けてお話くださり（第15回、2005.12）、王恩美会員（一橋大学院生）が戦後初期の韓国華僑の歴史とアイデンティティについて報告した（第8回、2004.2）。

在野の台湾関係者では、台北で『台湾ファウスト』を上演されたばかりの演劇家桜井大造さんが、映像を交えながら台湾で今、この芝居を演じる意義についてお話くださった（第9回、2005.4）。また、日本統治下で教育を受け、白色テロの犠牲となったツォウ族エリートの高一生について、ご遺族の馬場美英さんにお話いただいた（第19回、2006.7）。

以上、18名の報告者やテーマについていえば、十分にバランスが取れ、多様であると同時に、ようやく関連テーマごとに研究の蓄積が始まったところであるといえよう。

毎回、参加者は15名前後だが、多いときには30名を越え、講師やテーマによって参加者の顔ぶれは大きく異なる。遠く大阪・広島にお住まいの方や、台湾に留学中の日本人院生、また来日中の韓国人研究者グループがわざわざ参加して下さったこともあった。また、台湾学会のHPに掲載されたお知らせをご覧になって、日本各地、あるいは台湾からも資料請求のお便りをいただいたり、反対に資料や情報をご提供いただいたこともある。人の交流という点でも十分成功したといえるだろう。今後とも発足当初の理念を忘れず、より多くの方にご参加いただければと思う。なお、発表を希望される方は、橋本までぜひご連絡をいただきたい。

学会・シンポジウム等参加記

天理台湾学会第16回研究大会報告 河原功（成蹊学園）

天理台湾学会の「第16回研究大会」が、2006年7月1日(土)に天理大学で開催された。院生を中心にして、さまざまな分野からの発表で、充実したものだ。

○午前の部〈第1会議室〉

劉海燕(名古屋大学大学院)「台湾新文学初期の小説－「犬羊禍」について－」
許時嘉(名古屋大学大学院)「文明の名を以って－『台湾協学会報』の言語使用とその意図－」
莫素微(中華技術学院)「周金波〈志願兵〉と市民権の追究」

○午前の部〈第2会議室〉

柳蕙(※ケイ)心(大阪外国語大学大学院)「釈聖巖の日本留学について」
許雅妮(※ニ) (早稲田大学大学院)「日治時代後期(1930-1945)における台湾原住民教育－「教育所」の役割－」
堤智子(天理大学)「戦後台湾の言語状況－媒介語としての日本語－」
白柳弘幸(玉川大学教育博物館)「玉川大学教育博物館所蔵教育史資料について－外地教科書を中心にして－」

○午後の部〈第1会議室〉

川瀬健一(東洋思想研究所)「日本統治時代の台湾映画史と施策－資料の発掘と聞き取り調査－」
角南聡一郎(元興寺文化財研究所)「台湾永代供養墓の現在」

○特別記念講演

今回は午前の部で2会場に分かれての発表で、すべてを聴講することは出来なかったが、内容的に興味をおぼえるものが多かった。その一部を紹介したい。

・許時嘉「文明の名を以て—『台湾協会会報』の言語使用とその意図」

『台湾協会会報』を言語使用の面から、綿密に分析したものである。その結果、『台湾協会会報』では「和文に多様な論調が見えるにもかかわらず、台湾人紳士を讀者層と想定する漢文蘭では終始『文明』のみを強調する傾向が明らかに見られた」と判断し、『台湾協会会報』の漢文欄が担ったのは「『文明開化』の日本帝国の宣伝役のみならず、台湾人の文明観を育成、成熟させる役割だったといってもよいであろう」と読み取っている。

・莫素微「周金波〈志願兵〉と市民権の追究」

論者は周金波の小説「志願兵」を、「戦争協力の作品とは思えない」「三人の登場人物は台湾内での階級社会をそれぞれ表している。日本語を通じて、台湾人としての共通のアイデンティティを共有できた」「志願兵というものをかりて、それを明らかにしようとしたのだ」と強調するものであった。つまり、「皇民作家」とレッテルを押され、批判の対象とされてきた周金波を、擁護する発表であった。

会場には周金波の子息、周振英氏も参加、周金波の日本語読みは「シュウ・キンパ」か「シュウ・キンパ」というフロアからの質問に、「シュウ・キンパ」であると明言された。

本年6月の日本近代文学会(白百合女子大学)で、龍瑛宗のことを正しくは「リュウ・エイソウ」と呼ぶべきところ、呉叡人氏は「リュウ・エイシュウ」と呼んでいた。そのため、日本近代文学会員は不幸なことに、龍瑛宗のことを「リュウ・エイシュウ」と誤って覚えさせられたことになる。そのことがあった直後だけに、「シュウ・キンパ」が正しい読み方であると聞かされたことは収穫であった。ついでに、王昶雄は「オウ・ショウユウ」と呼ぶのが正しいと、藤井省三氏が本人に確認したのを、同席していた私も記憶している。こうした日本語呼びの統一は大事なことだと再認識させられた。

・許雅妮(※二)「日治時代後期(1930-1945)における台湾原住民教育」

警察官が担当する「教育所」での「台湾原住民教育」を、日本統治後期(1930-1945)に考察するというのが論文の主旨である。慎重に論を進めており、学術性が高い筆運びになっている。それだけに、こちらとしての要求や期待が大きい。さて、難点をいくつか挙げたい。まず、問題意識として、先行研究の不備を批判しているが、それに対する論者の問題解決に至っていないのは残念である。また、「文献研究の欠落部分に新たな光をあてる手段として聞き取り調査を行った」といい、その一部が記載されているが、その対象者に関する説明が記されていないために、かえって論文そのものの評価を低めている。また、論者は、皇民化教育の進展によって原住民は「『蕃社』意識および『日本人』意識という多重民族アイデンティティを持っていた」とことになると述べた。だが、原住民が「『蕃社』意識」に加えて「『日本人』意識」を持つことによって、それを誇らしく思ったり、逆にその狭間で葛藤することもあろうが、これを一まとめにして原住民は「多重民族アイデンティティを持っていた」と決めつけることは問題だと、司会者から疑問が提起された。

・白柳弘幸「玉川大学教育博物館所蔵教育史資料について」

玉川大学教育博物館が所蔵する外地教育に関する資料の内訳を紹介するものであった。

最も多いのが朝鮮総督府著作発行教科書の8,290部、次いで台湾総督府著作発行教科書3,992部、満州国教科書は92部と少ない。卒業記念写真帳や卒業証書、賞状、通信簿などを含めると、玉川大学教育博物館には14,771点もの資料があるという。外地教育史資料としては日本最大の規模であるが、恐らく世界一の収蔵量であろう。

・川瀬健一「日本統治時代の台湾映画史と施策—資料の発掘と聞き取り調査—」

日本統治時代に日本教育を受けた世代、台湾人男女116名からの回答から、かれらはどのような日本語映画を見たかを集計したものである。アンケートに記載された68作品のうち、上位5位は、(1)愛染かつら(2)支那の夜(3)サヨンの鐘(4)宮本武蔵(5)蘇州の夜、だったという。(2)(3)(5)はいずれも李香蘭出演の作品でもある。

また、李香蘭が1941年1月15日に林献堂邸に招待されたときの記念写真が映写されたが、これも興味深いものであった。

・角南聡一郎「台湾永代供養墓の現在」

台中市、台北県新店市などの永代供養墓の事例をあげ、台湾における墓の現状を紹介する内容であった。台湾の墓制は、火葬の導入、納骨塔の設立を契機に急激に現代化し、永代供養墓の増加、そして多様な埋葬方法を売りにする墓苑産業が年々増加していることをスライドを交えて報告された。

第17回研究大会は、6月30日(土)に、天理大学で開催予定である。詳しくは「天理台湾学会」のHPを参照。

第10回現代台湾研究学術討論会参加記

圖左篤樹(関西大学大学院)

2006年9月12・13日の2日間にわたって、台湾史研究会・静宜大学日本語系共催の「第10回現代台湾研究学術討論会」が台中静宜大学蓋夏図書館にて開催された。今回で10回目を迎える討論会には、8名の報告者がエントリーし、日帰り参加を含め50名を超える盛大な討論会となった。

討論会は、曾煥棋氏(静宜大学日本語系主任)の開会の挨拶で幕を開け、続いて温豊文氏(東海大学社会科学研究院院長)が基調講演を行った。講演では、石田先生の台湾農村調査でのエピソードや、石田先生の人となりで紹介され、会場の涙を誘った。

第1分科会では、林春吟(京都大学大学院)報告は明朝以降の地図の変遷過程から、台湾の「国境」の画定過程の分析を通じて台湾の「近代化」に関する考察を行い、松田吉郎(兵庫教育大学)報告は頭囲が四種兼営組合になるまでの経営内容・役員組織・組合活動などの変遷過程を明らかにした。評論者の松金公正氏(宇都宮大学)から、林報告に対して「辺境」から「境界」への変化を前近代から近代への移行として一元的に捉えてよいのかという指摘がなされ、松田報告に対しては、産業組合の組織・方針といったものが戦前から戦後にどのように変容していったのかという問題提起がなされ、活発な議論が行われた。

続く第2分科会では、楊英賢(国立嘉義大学)報告では、マザーボードメーカー華碩電腦の企業間関係に注目し、「Time to Market」戦略が可能となった要因について論じられた。楊報告に対して筆者は、華碩電腦の「Time to Market」を可能とする生産

ラインの生産状況や、同社の純益部分のうち「Time to Market」戦略によるものはどれくらいの割合なのかといった質問を行った。フロアからは華碩電腦の社員へのインセンティブ制度や台湾パソコン業界の現状と今後の展開に関する質問があり、興味深い議論が展開され、時間不足を惜しまれながら分科会は終了した。その後の夕食会では、台中ならではの海鮮料理に舌鼓を打ちながら、参加者の親睦が深められた。

翌13日の第3分科会では、王珠恵（国立高雄第一科技大学）報告では、台湾における国際会議での問題点を指摘し、様々な言語使用による社会的対話の実現にむけての提言が行われた。何義麟（国立台北教育大学）報告では、1946年7月の渋谷事件の報道形態の分析を通じ、戦後初期の台湾ジャーナリズムの変容および海外ニュースの取り扱いの検討を行った。評論者の菅原慶乃氏（関西大学）からは、王報告に対して「母語」という用語の定義にしてより深い考察を求めるコメントがなされた。何報告に対しては、日本の渋谷事件の新聞記事を紹介することによって、渋谷事件に対する日台の報道形態の差違について問題が提起された。

第4分科会の城地茂（国立高雄第一科技大学）報告では、台湾に現存する数学書の紹介と南中国数理文化の特質の一端について考察がなされた。評論者の邱若山氏（静宜大学）からは、幼少時の算術やそろばん使用の体験談が紹介され、『指明算法』などの中国数学の使用状況がわかったのが印象深かった。

2日間にわたる学術討論会は松田吉郎代表の閉会の挨拶で幕を閉じた。第10回という節目にあたる今回の討論会は、石田浩前代表が長年温めてこられた企画で、静宜大学日本語系の全面的な協力により、盛会に終えることができた。この場を借りて、討論会開催にご尽力して頂いた、静宜大学の曾煥棋氏、張修慎氏、王恵珍氏、日本語系のスタッフの皆様にお礼を申し上げたい。

日本台湾学会活動状況

I 日本台湾学会第4期運営組織

第4期運営組織は、2006年6月2日の理事会で次のように改変された。

◎理事長：下村作次郎（天理大学）

◎副理事長：黄英哲（愛知大学）

◎理事：笠原政治（横浜国立大学）、川上桃子（アジア経済研究所）、川島真（北海道大学）、河原功（成蹊学園）、黄英哲（愛知大学）、駒込武（京都大学）、近藤正己（近畿大学）、呉密察（台湾大学）、佐藤幸人（アジア経済研究所）、澤井律之（京都光華女子大学）、下村作次郎（天理大学）、滝田豪（大阪国際大学）、垂水千恵（横浜国立大学）、張士陽（早稲田大学）、藤井省三（東京大学）、松金公正（宇都宮大学）、松田康博（防衛研究所）、松田吉郎（兵庫教育大学）、やまだあつし（名古屋市立大学）、若林正文（東京大学）（五十音順、計20名）

◎常任理事：笠原政治、川上桃子、河原功、黄英哲、佐藤幸人、下村作次郎、張士陽、松金公正、松田康博、やまだあつし、若林正文（五十音順、計11名）

◎幹事：北村嘉恵（北海道大学）、沼崎一郎（東北大学）、植野弘子（東洋大学）、小笠原欣幸（東京外国語大学）、三尾裕子（東京外国語大学）、春山明哲（国会図書館）、渡辺剛（杏林大学）、浅野豊美（中京大学）、滝田豪（大阪国際大学）、中島航一（帝塚山大学）、前田直樹（広島大学）、朝元照雄（九州産業大学）、富田哲（淡江大学）、何義麟（台北師範学院）、陳培豊（成功大学）（計15名）

◎業務担当理事・幹事

・総務：下村作次郎

・事務局：滝田豪

・会計財務：川上桃子

・会報編集：やまだあつし（委員長）

常任理事全員

・企画：澤井律之（委員長・文学）、黄英哲（副委員長・文学）、笠原政治（人類学）、松田吉郎（歴史）、近藤正己（歴史）、中島航一（経済）、前田直樹（政治）

・定例研究会：佐藤幸人（関東部会）、松田吉郎（関西部会）、富田哲（台北部会）

・広報・ホームページ：佐藤幸人

・ニュースレター編集：松金公正

・文献目録：松田康博

・理事会書記：渡辺剛

・会計監査：今井孝司（2005年度～2006年度）、魚住悦子（2006年度～2007年度）

・国際交流：若林正文

・学会賞：涂（※トゥ）照彦（委員長）、近藤正己（副委員長）

・選挙管理委員：今井孝司（委員長）、李郁蕙（※ケイ）、菅原慶乃

（総務担当理事 下村作次郎）

II 理事会

【第4期理事会常任理事会第4回会議議事録】（抄）

日時：2006年7月15日、

場所：東大駒場キャンパス18号館9階中国語・朝鮮語部会室

1、戦後日本における台湾関係文献目録：6,561件（7月15日現在）。

2、会員名簿の作成について：12月中に名簿を作成し、1月中に理事選挙の書類と同時に送付予定。

3、第4回関西部会大会について：12月2日土曜日に京都光華女子大学にて開催予定。澤井実行委員長。

4、第8回大会決算報告概要について：(1)大会参加者は180名。(2)参加費収入は37万6千円。(3)論文集のみの売り上げは5万6千円。(4)交流協会へは51万円を経費協力申告。(5)支出が当初予定より大幅に増えた項目は、国内及び台湾からの招聘者の航空料金がある。(6)広報費10万円強の予定が、印刷がかさんだため14万円強となった。これは、振り込み用紙印刷代による。

5、第8回大会について：(1)参加者は好調な伸び。(2)論文集のみ購入も30部弱あり。貴重な収入源となった。今回は論文集が希望者全てに行き渡った。(3)分科会は、参加者が50名近いところもあったので、今後は部屋のキャパに注意する必要がある。(4)懇親会は好調であった。招待者4名、バイト学生12名については会費を免除した。(5)会計は報告事項で了承済み。

6、第9回大会実行委員会について：

(1) 実行委員会の構成

アジ研所属会員6名を中心に構成する。

(2) 宿泊施設

アジ研近隣のO V T Aが利用可能。1泊6800円で200名が収容可能。

7、「第9回学術大会分科会企画・自由論題報告募集のお知らせ」について：(1)9月末締め切り予定。(2)07年3月に、実行委員会に企画委員会案を提出予定。

8、新会員の入会について：新入会員は7名が承認された。

9、学会報関連：学会報の寄贈先の検討。

10、学会報のPDF化について：今後の推進を検討する。

【第4期理事会常任理事会第5回会議議事録】(抄)

日時：2006年11月18日

場所：東大駒場キャンパス18号館4F「コラボレーションルーム2」

1、戦後日本における台湾関係文献目録

2、第9回学術大会実行委員会企画について：4分科会と4自由論題が応募された。締切日を間違えた自由論題についても追加応募認める。プラス当番校企画(審査免除)。記念講演者は、王甫昌氏が承諾済み。学術大会のベビーシッター・サービスを検討中。

3、分科会経費補助に関する方針案について：コメンテーターを依頼するときは、原則として会員に限る。交通費は実費、1企画当たり10万円である。宿泊費の上限は7,000円とする。また、交流協会の経費補助枠の割り当ては記念講演者を最優先とする。残りの場合は報告者をコメンテーターに優先する。報告者のみで3名を上回る場合は、企画毎の経費補助(10万円まで可)の参加者割り当てを勘案し、会計担当理事が交流協会補助枠の割り当て案を作成して、企画委員会で承認する。宿泊費補助に関して、上限については、企画委員長および実行委員長の協議によって決定することとする。第9回大会については上限を7,000円とする。

4、新会員の入会について：14名一括承認。2名の退会を承認。

5、その他：第6回の常任理事会は2007年3月3日。理事選挙結果報告と大会準備経過報告などを予定。

(総務担当理事 下村作次郎)

III 定例研究会

【日本台湾学会 定例研究会】

第40回(歴史・政治・経済部会)

日時：2006年4月22日(土)13:30～

場所：明治大学駿河台キャンパス1095教室(リバティタワー9階)

○修士論文報告会

報告者I：田上智宜(東京大学大学院博士課程)

テーマ：台湾における客家意識の形成

報告者II：家永真幸(東京大学大学院博士課程)

テーマ：分裂中国国家と故宮博物院—「宝物」と国家の自己正当化

第41回(歴史・政治・経済部会)

日時：2006年7月26日(水)18:30～

場所：上智大学2号館10階2-1015a会議室

報告者：星純子(東京大学大学院博士課程)

テーマ：現代台湾都市近郊農村の変容とコミュニティ運動における「政治交換」

第42回(歴史・政治・経済部会)

日時：2006年9月27日(水)18:30～

場所：明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン309J教室

報告者：佐藤幸人(アジア経済研究所)

テーマ：台湾ハイテク産業の生成と発展

第43回(歴史・政治・経済部会)

日時：2007年1月12日(金)18:30～

場所：上智大学2号館10階2-1015a会議室

報告者：石川誠人(立教大学大学院博士課程)

テーマ：信頼関係の危機と維持—1961年中国国連代表権問題をめぐる米華関係—

(編集部)

【日本台湾学会 台北定例研究会】

第36回 2006年4月22日(土)15:00～

場所：国立台北教育大学行政大楼506室

報告者：劉麟玉(四国学院大学)

テーマ：梶源次郎と黒澤隆朝による台湾民族音楽調査(1943)—南方政策との関わりをめぐって—(言語：北京語、レジュメは日本語)

第37回 2006年6月24日(土)15:00～

場所：国立台北教育大学行政大楼506室

報告者：張文薰(国立政治大学)

テーマ：従「現代」観想「故郷」—張文環『山茶花』作為文本的可能(言語：北京語、質疑応答は北京語及び日本語)

第38回 2006年8月11日(金) 15:00～

場所: 国立台北教育大学行政大樓506室

報告者: 河原功(成蹊学園)

テーマ: 日本統治下台湾での「検閲」の実態(言語: 日本語、質疑応答は北京語及び日本語)

対話人(問題提起等): 李承機(国立成功大学)

第39回 2006年9月23日(土) 15:00～

場所: 国立台北教育大学行政大樓506室

報告者: 植野弘子(東洋大学)

テーマ: 日本統治期台湾における生活の「日本化」とその後—台南「高女」女性のライフヒストリーを通じて—(言語: 日本語、質疑応答は北京語及び日本語)

第40回 2006年12月30日(土) 15:00～

場所: 国立台北教育大学行政大樓506室

報告者: 李尚霖(開南大学)

テーマ: “台湾通”試論—日本之台湾殖民統治と通訳—(言語: 日本語・北京語)

コメンテーター: 陳培豊(中央研究院)

第41回 2007年2月3日(土) 15:00～

場所: 国立台北教育大学行政大樓506室

報告者: 佐藤幸人(アジア経済研究所)

テーマ: 中国コンビニエンスストア事業における戦略の選択—セブンイレブンとファミリーマート—(言語: 日本語)

(編集部)

IV 関西部会研究大会

日本台湾学会第4回関西部会研究大会は、台湾史研究会との共催により、2006年12月2日に京都光華女子大学の慈光館5階太子堂で開催されました。報告は以下の通り。

- ・王喆(※テツ)(横浜国立大学大学院)
台湾の通貨主権再建期における為替政策
評論者: 北波道子(法政大学)
- ・羽田哲(海洋政策研究財団研究員)
「海洋」から見た中台関係—領海、排他的経済水域(EEZ)、大陸棚(CS)画定の研究—
評論者: 前田直樹(広島大学)
- ・謝政徳(大阪大学研究生)
植民地時代台湾の地方制度に関する—考察—昭和十年の改正地方制度を中心に—
評論者: やまだあつし(名古屋市立大学)
- ・劉海燕(名古屋大学大学院)
日本統治時代における台湾青年の恋愛観について—『彼女は何処へ?』の分析を中心として—
評論者: 澤井律之(京都光華女子大学)
- ・謝億榮(北九州市立大学大学院)
増大する「台中結婚」の政治的インパクト
—中国人配偶者の政治的活動への参与と影響—
評論者: 今井孝司(関西大学)
- ・村島健司(関西学院大学大学院)
宗教慈善団体から見る台湾社会学研究の可能性—佛教慈濟功德会を事例に—
評論者: 今井孝司(関西大学)

編集後記

いつもお待たせして申し訳ありません。ようやく第12号が出来上がりましたのでお届けします。「高鉄」も開通しましたし、本レターも今後発行の遅延がないようにつとめようと思います。また、会員の皆様からの台湾研究関連情報、学会・シンポジウムの参加記等、積極的なご投稿お待ちしております。

(ニュースレター担当理事 松金公正)

日本台湾学会ニュースレター 第12号
発行: 日本台湾学会(代表 下村作次郎)
印刷: 株式会社 井上総合印刷
発行年月: 2007年3月
〔日本台湾学会事務局〕
〒573-0192: 大阪府枚方市杉3丁目50番1号
大阪国際大学法政経学部滝田豪研究室気付
E-mail: jats@pel.oiu.ac.jp
〔ニュースレター発行事務局〕
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
宇都宮大学国際学部松金研究室気付
TEL: 028(649)5165(代)、FAX: 028(649)5171
E-mail: matskane@cc.utsunomiya-u.ac.jp